

研究ノート

## Lesbian-motherの子育ては健全か

発達心理学分野の実証研究とそれをめぐる議論

有田 啓子\*

1. はじめに
2. Lesbian-motherをめぐる発達心理学分野における実証研究
3. 上記をめぐる諸議論
  - 3-1 生殖医療分野より
  - 3-2 法学分野より
  - 3-3 心理学分野より
  - 3-4 社会学分野より
4. 考察

### 1. はじめに

母子家庭が増えていると言われる。2003年6月現在で、122万5,400世帯であるという<sup>1</sup>。しかし、日本の世帯総数は約4,600万であるので、わずか、3%にもみたくない。割合からいえば、極めて少数であり、「家族」制度の根幹の再考を促すには、やや説得力に欠けると言われても致し方ないかもしれない。そこで、やや空想的だが、全くあり得ないわけではないケースを考えてみる。例えば、複数の母子家庭が同居して、育児を助け合うことをはじめたとする。これはいまでも十分あり得ることだろう。やがて年月が経ち、子ども達、親たちに情が湧き、例えば、血は繋がらぬが同居の子、親を相互に養育・教育・看護する諸権利、果ては相続についての権利を求めたとしよう。母子家庭の親同士は、当然婚姻制度では保護されないので、制度的には圧倒的に脆弱であり、他の家庭に生まれた子どもとの不平等を訴えるということもあり得るかもしれない。つまり、家族は、婚姻してはじめて与えられる厚い制度に守られているのであるが、その他の家族が、たとえ数の上では少数であっても、同等の権利を求めはじめたとき、それをどのように考えればよいのか。あくまで例外として扱うならば別であるが、もしも少数者であってもも同等の権利を保障する立場にあえて立つならば、例えば民法の親族編・相続編の諸規定、例えば重婚禁止規定・遺留分規定等、婚姻制度の根幹の再考が迫られるかもしれない。これがさらに、同性愛者同士が助け合って子育てをする場合はどうであろうか、もちろん数は極めて少数であろうし、問題はさらに複雑で、父親（母親）を欠いた、母親（父親）複数による子どもの成長はいったいどのようなものとなるのか等、未知の問題が山積みであろう。もはや現時点の知見では、対応困難であると国も認めたと、先に成立した「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」<sup>2</sup>を解することもできないではないかもしれない。昨今の生殖補助医療技術は、その適応対象を婚姻夫婦に医療者自身によって自主限定されている。しかしながら、まさにその技術は、同性愛者の生殖をも補助してしまう転倒状況が現実には起こっている。現実の実態としては最も、「標準」からはずれたケース、本稿は、その地点から「家族」を再考する際の考察の一助となる資料を提供したい。

---

キーワード：レズビアン・マザー、非伝統的子育て、人工授精、ゴロンボク、バターソン

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2003年度入学 生命領域

## 2 Lesbian-motherをめぐり発達心理学分野における実証研究

LGBT<sup>3</sup>の子育ては子に悪影響はないのか、この問いについて、関心が寄せられることは日本ではまだほとんどないが、特に欧米では、少なくない議論が繰り返されている。

Lesbian-mother (以下、LMと表記する)<sup>4</sup>の子育てをめぐり論文は、早いものでは、1950年代半ばに報告されている。しかし、実証的調査がなされたのは、発達心理学領域における研究であり、それは、70年代を待たねばならない。最も早いものの一つに1973年Goodman, B.M. "The Lesbian Mother"がある。

この30年間のおよその研究の流れを概観したい。

初期の研究は、過去に婚姻経験のあるLMがほとんどであった実態を反映して、異性間性行為あるいは養子縁組にて子を得たケースを対象としていたが、やがて、人工授精で子を得たLMの研究に移行して、さらには、自然妊娠か人工妊娠か、親が複数か単数か、という参照軸も加味した比較研究へと変遷している。その観点から1970~80年代前半、80年代後半~90年代前半、1990年代後半以降と、3期に分け、整理したい。

### 【1970~80年代前半】

初期の研究はサンプル数も少なく、収集法もスノーボールメソッドであるなど、無作為性基準をクリアできていない限界もあるが、LMは本当に子育てに適さないのか、「親」として適格性がないのかについて検証するという、明確な意図に貫かれた研究が重ねられた。そこで、heterosexual mother (以下、HMと表記する) やその子と比較し、統計処理にて有意差を見るという方法がとられた。

例えば、Hoeffler (1981) は、LMに育てられた子はジェンダー役割行動において混乱や逸脱が生じるか否かを検証するために、子ども達に「ジェンダー型づけされた」<sup>5</sup>おもちゃ(ビーズ・人形・熊のぬいぐるみなどと電車・ゴリラ・騎士など)を選ばせて比較した。Miller (1982) は、子ども同士のけんかなど、日常の風景を描いたスライドを呈示して、親としてどのように対処するかを問い、両者の回答傾向を比較した。Rand (1982) は、CPI<sup>6</sup>を用いて、子ども達の自己受容・満足感・自己達成感等の心理学的健全さを比較した。これら、いずれにおいても、LMとHM、双方の子育てにおける母親の態度・傾向において、また両者の子ども達の心理的安寧において、統計的に見て有意な差は見いだされないと結論が導き出されたのだ<sup>7</sup>。

### 【1980年代後半~90年代前半】

研究方法をより洗練させるための条件が徐々に整備されていった時期である。サンプル内で、非婚で、AIDを選択したLMの割合が徐々に増えていく。

Green<sup>8</sup>ら(1986)は、50人のLM、40人のsingle-HMを調査した。前者は、各地の女性センターにおける受講生、あるいは友人のネットワークから集められた<sup>9</sup>。母親のしつけの態度などについては、Bem Sex-Role Inventory<sup>10</sup>、the Adjective Checklist<sup>11</sup>、Jackson PRF-E<sup>12</sup>を、子どもの知的レベルの検査については、WPPSI<sup>13</sup>、WISC-R<sup>14</sup>を使用して、有意差を調べた。

LMの子、「最善の利益」とはなになのかが、法廷で問題になってきた。法廷は、homosexualの母親と暮らす息子・娘の成長について、短期間の問題と、長期間にわたる問題とに分けて関心を持っている。すなわち、前者は子に付されるスティグマと、子の性的アイデンティティの混乱、後者は、子がhomosexualになる可能性である。我々のデータは、LMの子も、single-HMの子も、どちらも、友だちからの受け入れや社会的適応性において、差異はないことを示している。例えば、子どもへのインタビューで、次のことを聞いた。もっとも親しい友だちは誰か、学校や近所で同性や異性の子どもから人気があるかと。LMの娘の80%、single-HMの娘の75%が、同じクラスの同性の友だちグループから、他の女兒より、「かなり人気がある」「少しだけ人気がある」「同じ」と答えた。(中略)つまり、差異は見いだされなかった。性的アイデンティティ(性自認)に関してはデータは差異なしと示した。親の性的指向がどのくらい子の性的指向に影響を与えるのかについてはデータがない。[Green 1986:168]

Patterson (1994) は、37のLM家族を調査した<sup>15</sup>。

結論は、従来の研究と相違なく、LMに生まれた子の社会的人格的成長について、HMの子どもたちと、非常に似ているということである。

しかし、いくつかの違いがある。もっとも注目すべき違いは、子どもの自己意識、という領域であらわれている。特に、LMの子が、報告していることは次の点である。すなわち、彼ら彼女らは、よりストレスの反応（例えば、怒りを感じる、恐怖を感じる、動揺し混乱する）を、経験すると報告している。そして、同時に、より強い喜びの感情（楽しい、充足する、自分自身に満足する）を経験することも報告している。

Pattersonは、この研究の限界についても明記している。すなわち、サンプル収集法が無作為ではないこと、対象者がほとんど白人で中流階級であること、居住地域も限定されていること、加えて、観察データが含まれておらず、また、友だちや教師などの第三者からのデータも含まれていないことである。

## 【1990代後半～】

lesbianから人工授精の施術を求められた医療関係当事者が、実践的な問いを発するようになり、それを受けた研究がなされはじめる。すなわち、LMへの施術の心理学的・倫理的適否について実証研究をはじめ。方法論上の懸案事項、すなわち、サンプルの無作為抽出・比較変数の設定・子どもの年齢の統制など方法論上の諸問題がクリアされていく<sup>16</sup>。

Brewaeyns<sup>17</sup>ら（1997）は、まず、lesbianの人工授精についての現状を次のように捉える。

lesbianが人工授精を使用することについては、ヨーロッパの関連医療機関においては、まだ議論の途上であるというとならえかたが多い。例えばイギリスでは、HFEA<sup>18</sup>は、lesbianのカップルが人工授精を利用することを、積極的に勧めない。なぜなら、子は父親が必要であるとの立場に立つので。一方、アメリカの生殖医学に関する学会は、もう少しフレキシブルである。すなわち、非伝統的家族に生殖補助医療を適用することは、倫理に反しないと考える。ただ、子どもにとってストレスであることにはかわりはない、と指摘している。ベルギーおよびオランダにおいては、非伝統的家族による生殖補助医療の利用について、まだ、法的規制はないが、あまり実施されていない。しかし、これからニーズは増すだろう。[Brewaeyns1997:1349]

Brewaeynsらは、LMの子育てにおいて、問題と考えられる点を、3点挙げている。すなわち、第一に父親が子の出生の時点から不在で、子は父親不在の家庭で成長することになるが、そのことの子に与える影響はどうか、第二に、親が同性愛者であることは子にどのような影響を与えるのか、第三に、匿名のドナーによって出生することが子にどのような影響を与えるのかである。それらを指摘した上で、Brewaeynsらは、間接的にこれらの問題に解答を与えようとする。すなわち、子育てにおいて、パートナーとの分担割合（生物学的母親から聞き取り、0点から4点までの範囲で点数化したものを比較）しつけにおける、パートナーの貢献度（同上）子どもから見た親たちの相互関係（家族関係テストFRT）、子どもの行動面・情緒面の適応性（CBCL）、子どもたちのジェンダー役割行動（PSAI）で、比較分析した。

LMとの比較対照群として、自然妊娠のHM家族と、人工授精妊娠のHM家族の2グループを設定する<sup>19</sup>。結論は、3グループ間に差異はなかった。すなわち、父親が存在するか否か、親の性的指向、自然妊娠か人工妊娠か、にかかわらず、差異がなかったということになる。

ただし、顕著な特徴が見られた点は、social-LMに関するものである。social-LMとは、Brewaeynsらの造語で、LMのパートナーの女性のことを指す。ところでこのsocial-LMとLMの子との間の相互関係の質は、HM家族における父子関係よりも高かった。LMの子どもたちは、social-LMのことを、HM家族における父親のように、あるいはそれ以上に、家族のように見なしていた。Brewaeynsらは、上記のようにLM家族内で高い貢献をしているにもかかわらず、social-LM<sup>20</sup>は、法的認知のない状態に放置されていることは、当人にとっても、子にとっても、理不尽なことであると指摘している。

Chanら（1998）は、カリフォルニア精子バンク<sup>21</sup>の精子ドナーを利用して人工授精で子をもうけた、4種類の家族集団の、子の心理学的適応性を調査した。すなわち、couple-LM家族（34組、すなわち68人）、single-LM家族（21人）、couple-HM家族（16組、すなわち32人）、single-HM家族（9人）の4グループである。（回答率は、順に、100%、62%、59%、69%）先行研究が、家族成員外の情報源からのデータ収集を欠いていた反省から、保育士・

教師による観察資料も加味して、3つのカテゴリーにおいて検査を実施した。すなわち、子の適応性については、CBCL、TRF<sup>22</sup>、親の適応度については、「親ストレス表PSI/SF」、親子関係の満足度については、LWMAT<sup>23</sup>を使用した。Brewaeyrsらの研究が欠いていた「親の数」の比較軸を加味したが、「自然妊娠-人工妊娠」の比較軸を欠いている。

Golombok (2003) に至り、サンプルの無作為抽出に成功する。すなわち、ブリストル大学のThe Avon Longitudinal Study of Parents and Children において、1991年4月から、1992年12月にかけて、子どもの健康と環境との関係を調べるために、14,541名の母親に質問紙を使って調査が行われたが、そのなかの質問項目、「パートナーはいますか？それは男性？女性？」という項目を使って、LMを無作為に抽出する試みがなされたのである。その結果、39組のLM家族が無作為抽出された。74組のcouple-HM家族、60人のsingle-HMと比較調査された。結果は、これまでみてきた多くの研究と違わず、LM家族と、HM家族とでは、親子関係、子の心理的安寧において、差異は見いだされなかったのだ。

また、Golombok&Tasker (1996) では、長期追跡調査も行っている。すなわち、1976-1977年に、LM27人とその子39人、HM27人とその子39人への調査を、その16年後の1992-1993年に再び行っている。

### 3. 実証研究をめぐる諸議論

以下で、4つのレビューを紹介する。それぞれが、異なる研究領域のものであるが、その領域を代表するものでも、大勢を占める見解でもないことは断っておかなければならない。それぞれが有る程度の質を持った、典型的なレビューであると考えられる。

#### 3-1. 生殖医療分野より

Hunfeld他 (2001)<sup>24</sup>は、研究目的を、次のように記している。

2000年、オランダ政府は、12の公認の不妊治療センターに対して指導を行った。すなわち、4つのセンターが、lesbianへのサービス提供を、8つのセンターが、非婚姻女性へのそれを差し控えていたからである。これは1994年以来のオランダにおける総合的平等法、すなわち、宗教・信条・政治思想・人種・性・国籍・市民権上の状態・性的指向に関わって直接・間接の差別的取り扱いをしてはならない、という施策に反するとされたのである。(中略) 本論文では、子の発達と親の心理学的質において、健康なheterosexualな親に比べ、特定の集団は劣るという実証的調査はあるかを調べたい。[Hunfeld 2001:579]

Hunfeldらは、電子データベース (PubMedとPsycINFO) を利用して、次の3つの基準に合致する論文を探した。すなわち、

- 1) 1978年 (初のIVF児誕生) から、2002年5月までに英語で書かれ、発行された論文。
- 2) 査読のあるジャーナルに掲載された論文。
- 3) 不妊治療を受けた、特定のグループ、すなわち、lesbian・シングル女性・比較的高齢の女性・障害または難病を持つ女性、における、子の心理社会的発達・子育ての質、に焦点が当てられている論文。(子の発達とは、心理学的・社会的・性的発達。子育ての質とは、親子関係・情緒性・暖かさ・しつけの能力などである)

'Child development' と結合させて以下の検索語を用いて検索した。結果は次の通りである。'infertility treatment' では、21論文がヒットした。'reproductive technology' では、76論文が、'in-vitro fertilization' では、45論文が、'artificial insemination by donor' では、15論文が、'oocyte donation' では、3論文が、'frozen oocyte donation' では、2論文、合計162論文がヒットした。PsycINFOにて、同様の作業を行ったが、ヒットしなかった。

162論文すべてのアブストラクトまたは方法論の部分に眼を通したところ、上記3基準を満たす論文は8論文が見いだされた。いずれもlesbianか、シングル女性に焦点が当てられ、高齢の女性・重篤な疾患を抱える女性についてのものはなかった。その他の154論文はすべて、不妊治療の医学的・法学的・倫理的問題、子の身体的発達・運動発達、不妊治療後の「heterosexual」な両親への心理的影響、子の発達への影響、異なる不妊治療による子への心理

的影響を扱っていた。

この8論文から、次の6条件のうちの少なくとも4項目以上あてはまるものはどれかを検討した。二人の研究者がそれぞれ別個に採点化していった。

6条件とは、次のものである。

- 1) 最低1つの比較対照群を参照しているか。
- 2) サンプルのサイズ。比較対照群ごとに、25以上の参加があるか。  
検出力分析 ( $\alpha=0.05, \text{power}=0.80, \text{Cohen's } d=8, \text{ i.e. a large difference between the groups}$ ) が為されているか。
- 3) 無作為抽出法によって、サンプルが集められているか。
- 4) 研究の設計について。ケースコントロール・スタディ(事例統制研究)が為されているか、量的分析に基づいているか。
- 5) 結果の測定。標準化、信頼性、妥当性が、子どもの発達・子育ての質、に関してカバーできているか。
- 6) 統計的分析。最も重要な結果を測定するにあたり、適切な統計分析を使った仮説検定がなされているか。

上記の6条件すべてをみたしたのはBrewaey (1997) だった。それを含め、4条件以上みたしたのは6論文<sup>25</sup>であった。それらを精査して次のような結論を得ている。

まず、6論文すべてにおいて指摘されたことは、LMの家族においても、HMの家族においても、子育ての質に有意差はないということであった。また、6論文において共通して見いだされたことは、HMに比べ、LMは、別れた子どもの父親に、継続的に会わせるケースが多いという点であった。

ただし、子育ての質に有意差はない、という結論に対して、限定条件として以下の点があることを付記している。すなわち、まず、Brewaey以外の5論文はいずれも、サンプルの収集法が無作為でなく、LMは学歴も所得も比較的に高く、自ら進んで研究に協力した人々であり、バイアスがかかっている可能性が高い。Brewaeyの研究は、不妊センターからのサンプルの抽出もランダムであり、高い質を保持していたが、結論は他の5論文と同様であった。また、6論文はすべて、調査対象の子どもの年齢が9才以下であったので、子の性的指向についての考察ができなかったとしている。

以上をふまえ、Hunfeldらは、以下の結論を述べている。

LMは、現在でも、家族の理想型からは、逸脱していると考えられている。理想的な家族とは、父母のそろった家族であって、それ以外の家族は子どもになんらかの悪影響があるという思いこみも強い。しかし、我々が行ったレビューで明らかになったことは、強い証拠をもって、LMの思春期前期の子どもの発達、親の質において、HMとなんら違いがないことである。これは、聞き取り研究による結果とも合致する。LMについての6論文は、強い証拠能力があることがわかったが、しかしながら、結論を一般化するには、若干の限定性をふまえておくべきであろう。1点目は、サンプルの集め方である。ほとんどの研究がランダムサンプリングではないということである。ただし、Brewaey (1997) の研究は、とても高い質を持ち、不妊センターからのサンプリングもランダムになされている。そして導出された結論は、他のものと同様、差異はない、というものだった。2点目は、比較参照グループについての問題点である。我々は、比較対照群は、父母がそろっていて、なおかつ不妊治療を受けた家族であるべきであろうと考える。シングル女性が親である家族は、比較対照群としては適切ではない。だが、自然妊娠によるHM家族と比較の結果、差異なしと結論づけられたのだから、おそらく、不妊治療を受けたLM家族が子育ての環境としてリスクではないということは、導き出し得るだろう。3点目は、サンプルサイズである。6論文はサンプルサイズはそれぞれ15から84で、我々が基準とした25を、4論文が下回った。さらに問題は、サンプルが均質ではないことである。離婚後にLMになった女性の子どもと、はじめからLMの子どもとは、サンプルとしては均質ではないだろう。4点目は、ほとんどの研究がもっぱら、母親の報告に依存している点である。これはバイアスがかかることを念頭におかねばならない。最後に、6論文は、いずれも9才までの調査であって、思春期後期についてはない点である。

以上が、Hunfeldのレビューである。

### 3-2. 法学分野より

Wardle (1997) は、Brigham Young大学で、1978年以来、家族法の教鞭をとっている法学部教授である。同性愛者の親による子育てに関する諸議論を、次のように整理した上で、同性婚、同性愛者による子育てに反対の立場から自説を展開している。

1990年1月から、1995年12月までに発行されたローレビューのうち、同性婚に関するものは、72編あった。20年前には、わずか、8編であった。同様に、同性愛者による子育てに関する論文、すなわち、親権・訪問権・養子縁組・人工授精の問題を含む論文は、1990年から97年までに、少なくとも90編発行されている。一方、20年前は、わずか、3編であった。

ところで、上記の同性婚に関する論文のうち、同性婚に対して反対を表明しているものは、わずか1編であるのに対し、賛成しているものが67編と、その偏りははなはだしく、同性愛者による子育てにいたっては、ただの一編も批判していないのである。このアンバランスは、法社会学分野の他の諸テーマと比べて、著しい特徴であり、特定の立場が過剰に防衛されることは、自由闊達な議論を阻害するとWardleは指摘する<sup>26</sup>。

Wardleは、同性愛者の子育ての法的認知を求める議論は、大きく3種類に分かれるという。

まず、一つ目は、憲法論議である。同性愛行為を、親権訴訟等において、マイナスファクターとして考慮することは、プライバシー保護・親密な人的結合についての基本的人権・憲法修正第一条の侵害にあたるというものである。しかしこの件をめくり訴訟も起こされ、幾度となく議論がなされてきたが、いまだかつて、違憲判決がでたことがないとする<sup>27</sup>。

二つめは、政策論議である。それは次の4点に集約できるとする。

州は、homosexual行為を行う親に対して、スティグマを押しつけてはならない。

Homosexualな親は、婚姻したカップルやhomosexualな個人と同様の親業を提供できる。

たとえ同じジェンダーであっても、一人より二人のほうが、ベターなのだから、非伝統的な家族であっても、形成を促進するべきである。

Homosexualな関係をもつ成人による親業は、特定の子どもにとっては、ベストかもしれない。

これに対して、Wardleは、次のように論じる。

同性愛者の子育てが場合によっては成功することがあることは否定しない。ただ、問題は、同性愛者の子育てを法的に認知するということが、heterosexualの親が保有するすべての権利を、同性愛者にも与えることを意味するわけで、この点こそが、問題の核心なのである。すなわち、の信頼性の問題である。Wardleは、この問題に関して、発達心理学分野において、大量の研究がなされているとする。そのほとんどが を支持しており、同性愛者の子育ての法的認知を求める議論もまさに、それら発達心理学分野の成果を引用してなされている。それが、第3の議論群ということになる。

ところで、Wardleによれば、発達心理学分野の133編の論文を検討すると、それらの調査には方法論上の不備が見いだされるという。従って、それらの研究結果は、疑わざるを得ないとする。具体的にどのような不備があるかという、Wardleは、以下の3点をあげる。

一点目は、サンプルサイズの問題である。親の、ある要素についての子どもへの危害を調べる最近のある調査では、全国32州の460のコミュニティ、250,000人を対象に質問紙を配布している<sup>28</sup>。それに対して、同性愛者の子育てをめぐる論文は、多くても、Pattersonの40人程度であり、少ないものでは、5人というものすらある。このようなサンプルから導出された結論は信頼性に欠ける。二点目は、サンプルの収集方法である。ほとんどの調査は、ランダムサンプリングではなく、例えば、高学歴、高収入、白人、に偏っている場合が多い。婚姻内で生まれた子、婚姻外で人工授精により生まれた子、遺棄等の虐待を受けて里子に出されその後養子として迎えられた子がひとくくりに扱われている。三点目は、比較対照群として、シングルマザーの子ども集団が用いられていること。父母のそろっている、heterosexual家族とも比較しないとフェアではないだろうとする。

Wardleは、以上のように、発達心理学の実証研究の方法論上の不備を指摘した上で、父母がそろったheterosexual家族こそが、子どもにとって、必要であることを指摘する。最近の研究によると、父親の子育ては、母親によるそれとは明らかに異なる特徴を有するという。すなわち、父親は、母親に比べ、身体を動かす遊びをより多くこどもとする、触覚的なゲームをする、おもちゃをあまり使わないなどの点で異なるという。また、父親は、短気な息子

には、ポジティブな反応を示し、短気な娘には、よりネガティブな反応を示すと報告されている<sup>29</sup>。また、父親は、子ども達の認知的・身体的問題を解決する際に、好奇心を持つように支援する傾向があること、ある研究では、父親がより関わる乳児のほうが、心理学テストにおいて、高い得点を得たという。乳児たちは、父親がより多く関わるほど、より、周囲に応答的になり、ストレスの高い状況にも耐えることができるという<sup>30</sup>。

子どもを父親から離すことは、我々の社会では子どもの安寧を減少させる原因につながるともされる。具体的には、父親から離れて住む子ども達は、そうでない子ども達よりも、学校から、退学処分を受けた者が多い。1990年のプログレシブ・ポリシー協会の調査によると、犯罪と、一人親家庭とは、非常に関連性が有る。従って、家族形態をコントロールすることによって、犯罪と人種、犯罪と低所得との関係を、消失させることができるほどであると指摘しているとする<sup>31</sup>。

こうして、Wardleは、同性愛者の子育てが子どもに危害を与えないとする調査は信頼性がないとした上で、むしろ父母がそろった家族がいかにか子どもと社会にとって、必要かつ利点があるかを力説する。性的指向に関わらず、全ての婚姻外性交を法律で禁止することを支持するとする。その上で、具体的に、訴訟の場面では、「LMは子に危害を与える」という「反証可能な推定」を前提とすることを提案する。「LMは子に危害を与えない」という举证責任を、LMの側が負うべきだとするのである。

### 3-3 . 心理学分野より

アメリカにおける、発達心理学の権威ある学術誌のひとつ、*Developmental Psychology* の、1995年31巻1号は、「性的指向と発達」の特集号で、Pattersonが特別編集者となっている。Baumrind (1995) が、この号の論文全体に対してコメントを求められている。

全体で12論文あり、うち5論文は、lesbian/gay<sup>32</sup>は、生まれつきなのか、そうでないのかを問うもの、3論文は、lesbian/gayの青年にとってのリスクとは何か、4論文は、lesbian/gayに育てられた子のリスクとは何かを問うものとなっている。

本稿では、上記の最後の4論文をめぐるBaumrindのコメントを紹介したい。

今日の研究は、lesbianの子どもも、gayの子どもも、heterosexualカップルの子どももほとんど差異がないことをしめしていると、Baumrindも認めた上で、しかしながらそれらは、決定的なものではないと保留をつける。なぜなら、それらの研究方法のほとんどが、スモールサイズで、便宜的なサンプルに依っている点、回顧的なデータに依っている点、社会的なバイアスがかかっている可能性のある自己記述に依っている点、などの欠点があるからであるとする。

さらには、それらの調査は、親子関係に関して、理論的な新たな仮説を提起しているのでもない。また、インタビュー調査などを通して、アイデンティティの混乱などの問題に関して、質的な観察もできていないとBaumrind指摘する。

たしかに、もしも、LMたちが、長期にわたって、偏見から子どもを守ることができたなら、それは驚くべきことだとBaumrindは一定の評価を与える。また、もしも、子ども自身のセクシュアル・アイデンティティが、親から影響を受けなかったならば、それも驚くべきことだろうとも指摘する。性的指向や、価値感、ライフスタイル、アイデンティティをめぐる感じ方、社交性などにおける、heterosexualの家族で育った者との違いは、後期青年期において、見いだされるだろう。しかし、違いは、欠陥ではない。たしかに、あるlesbian/gayたちが信じているように、彼女ら、彼らの、子ども達は、より寛容で、共感的で、他者の受容に長けているかもしれないとする。

homosexualの家族に関する研究は、人が社会化することの多様性を教えてくれるだろう。例えば、homosexualの家族において、主たる子育てのスタイルとはどのようなものなのか、またそれは、heterosexualの家族が子どもに与える影響と同様のものを与えるのか、子どもと生物学的には繋がりのない親は、子どもとの関係において、heterosexualにおける場合と、homosexualにおける場合とは、異なるのか、継親や養親における問題と似ているのか、いないのか、LMに育てられた男児は、heterosexualの家族における同じように、「男らしさ」を、安心して発露させることができるのか、社会生物学者は、生物学的につながらない子どもに対して高いコストを払っているsocial-LMの行動をどのように説明するのか、など、多くの研究テーマが立てられ得るはずであるとする。

良き人生の抜きがたい構成要素はなにかと世論調査をすれば、人々は、子どもがいて、幸せな結婚生活があること、を、トップに應えるだろうとBaumrindは指摘する。ほとんどの人々にとってはもはや現実のものではないのであるが、一生涯続く、核家族において子どもを育てることが、いまだにアメリカ人にとって、ひとつの理想なのであるとする。そのような理想的な家族と、その他の雑多な家族とを、同等に扱えという要求は、根強い抵抗に遭うことになる。多くのアメリカ人は、特に子どもの視点に立って問われたならば、現在生じているアメリカの家族の変貌に、否定的なのである。

一方、多くの人々にとって、性的指向とは、人格にも関わるほぼ安定したものである。しかし、それはたしかであろうか？本当に、本能、宿命のたぐいなのか？

もしも、与件であるということになったなら、政策レベルでは、性的指向を名指して、非難することは、禁止すべきことになるだろう。なぜなら、人は、性的指向をコントロールすることができず、責任をとることができないからである。L/Gが遺伝的なものなのなら、もはや、罪でもなくなる。人種やジェンダーのように、変更不可能なものならば、法廷は、heterosexualでない者が差別されることから守る義務が生じるだろう。一方、職業選択時、保険加入時における差別などが生じうるだろう。性的指向を与件とする立場は、heterosexualの者が、lesbian/gayを、単に違う人々としてではなく、不完全で病理的な存在として扱うことを許してしまうかもしれない。

たしかに多くの人々にとって、性的指向は、選択の結果であるとは感じられない。ただし、瞳の色のような、所与のものとも、また違う。また、一方、女性には、性的指向もまた選択の結果だと感じる人も多い。その選択も、性的魅力だけで為されているわけではなく、社会的慣習や、ジェンダー役割への親和性、社会化の時点で親密だった人物などにも関係があるだろう。社会の寛容性とは、選択の制限に基づくものではなく、私的生活における選択の自由の尊重、heterosexualではない人々の社会的貢献への顧慮、文化やライフスタイルの多様性に対する正当な評価に基づくべきものであろう。

以上が、Baumrindの考察である。

### 3-4 . 社会学分野より

Stacey (2001) は、先行研究に加え、1981年から1998年にかけての21の心理学的実証研究論文を検討し、社会学者の立場から議論を行っている。論文収集の際の条件として、LM家族の子どもに関するデータが含まれていること、統計的検定がなされていること、子どもの発達についての発見が含まれていること、の3条件を含むものと設定している。

LM家庭における子どもの発達については、ジェンダー行動、性的行動、心理学的適応について、LM家庭における親については、子どものジェンダー行動や性的発達に対してどのような行動をとるか、親としてのスキル、子どもとの関係、心理学的適応について、見いだされた結果を整理すると、そのほとんどにおいて、「有意な差異は見いだされなかった」という結論となっているという。

ところで、Staceyは、性的指向は、こと親権裁判等においては、非常に深刻なファクターとして機能している現実が、社会学分野の研究者に、軽々にこの領域に踏み込むことを躊躇させてしまっており、不幸にもこの沈黙が、発達心理学において見いだされた諸データに関しての社会的分析を妥協的なものにしてしまっていると指摘する。そこで、Staceyは、わずかではあるが見いだされた、有意な差異をあえて見過ごさずに、記述することにするのである。

#### 子どものジェンダー選好<sup>33</sup>

Green (1986) のによれば、結論としては、たしかに大きな差異がないとされた。しかしながら、つぎのような報告もしているのである。すなわち、LMの子ども、特に女兒は、ジェンダータイプにおいて中性的な、衣服・遊び・行動をすることがより多かったこと、また、女兒自身の報告として、男児も女兒も双方が参加するような活動に興味を持つこと、また、「男の子っぽくもあり女の子っぽくもあるような」活動に興味を持つこと、それに対して、HMの女兒の場合は、「女の子っぽい」活動に興味を持つ女兒がより多いことが報告されている。

また、Breweays (1997) は、LMの、人工授精によって産まれた男児が、the PSAI-preschool activities inventoryにおいて、「マッチョさ」のスコアが、有意に低かった。HMの男児のスコアが、最も高かったことを報

告している。ただし、15人と、11人、と、サンプル数は多くない。

#### 子どもの性的指向

Golombok (1997) において、LM家庭に育った成人、25人中 (平均24才)、6人が、「同性愛的行為」を経験したことがある、と報告している。HM家庭に育った成人は、24人中 (平均24才)、0人であった。また、同性に惹かれる、あるいは行為を持つ可能性がある、LMの家庭に育った成人22人中、14人が告白している。HMの場合は、18人中、3人だった。

#### 子どものメンタルヘルス

法律家・政策担当者は、LGの子どもは、非常に強い情緒面での傷をおわされているのではないかと懸念してきた。そこで、子どもの自己評価や心理学的安寧が、非常に問題にされてきたのだが、この点についてもほとんどの調査において、差異なしと報告されている。しかし、この点についても、若干の差異が見いだされている。Patterson (1994) は、「4歳から9歳の子どもについては、LMの子どものほうが、HMの子どもよりも、よりストレスを表明している」と報告している。

#### 子どものジェンダー行動への親としての関わり

Hoeffler (1981) も上記同様、結論で、次のように述べている。「印象的なのは、違いよりは、相似性である。子ども達が身につけた性的役割行動、母親たちの、子どもをどのような性的役割行動へと導く傾向があるか、そのどちらにおいても、LMとHMは似ていた、ということである」と。

しかし、Staceyは、Hoefflerが見いだした、興味深く、また、統計的にも意味のある発見は、次のものであるとする。すなわち、HMは、男の子が「男の子らしい」活動をする、女の子が「女の子らしい」活動することを、好む者が多いが、LMはそのような関心を持っていない者が多い。LMが、子どもの遊びについて望む内容は、ジェンダー中立的である場合が多いと報告されている。

#### 親としてのスキル

この領域で特筆すべきは、LMのパートナーであり、子どもにとっては、非生物学的母である女性の存在である。Brewae (1997) において、social-LMは、子にとっては義父にあたる人物に比べて、親としてのスキルにおいて、より高得点を得ている。また、social-LMのほうが、義父よりも、「共時性」(synchronicity) をより強く楽しんでいることが報告されている。Flaks (1995) においても、social-LMは、HMのパートナーに比べ、親としてのスキル・実践・子どもとの相互関係における質について、高い得点を得ている。また、social-LMのほうが、HMのパートナーよりも、しつけ・訓練など、子育てにおいて、明らかに多量の時間を割いていた。Golombok (1997)、Michael (1998) では、LMの子どもは、HMの子どもよりも、母親のパートナーに対して、性的なことに関する話しを話しやすいと語っていることが報告されている。

以上、Staceyは、執拗に、発達心理学分野における実証研究において見いだされた、LMとHMの子育てにおける差異を挙げていく。その意味するところを2点Staceyは指摘する。まず、かくのごとくに差異があるにもかかわらず、上記で挙げたすべての論文において、結論として、「大きな差異はなかった」としているが、その背景には、「差異があることは劣っている」、「HMによる子育てが最も理想的であるが、それと異ならずにされる子育ては、間違っていない」とする暗黙の前提があるのではないかと指摘する。2点目は、わずかではあれ、差異を無視することは、LMが提供するかもしれない、ジェンダーや性的アイデンティティの獲得の過程における貴重な情報を掴み損ねる可能性があることである。

最後に、Staceyは、子育てにおいて親の性的指向は、どのような意味を持つのかとの問いにもどる。それは、たしかに、なんらかの影響を子どもに与えることは、見てきたとおりである。その意味では、LMの子育てと、HMの子育てを、異なるものではないとは、単純に言えまい。ただし、Staceyは、その違いは、性的指向それ自体から派生したものではなく、社会に存するスティグマのせいであろうと主張する。例えば、婚姻外出産は、規範からはずれたものと見なされ、そのように扱われている。そこで、lesbianは、子を産み育てることからは、隔絶される。しかし、一部の社会的に成功した高学歴のlesbianは、高齢になってから、都会で、子どもを産むという傾向がみられ、その子どもたちには、なんらかの共通点が見いだされるかもしれないとする。しかし、そこにあるのは、性的指向へのスティグマが媒介となった、ある女性たちと子ども達の組合せにすぎないのである。同様に、lesbianカッ

ブルの離別率は、HMよりも高いようである。同性カップルには、婚姻制度のような、離別からの保護システムがない。ギデンズが紹介しているように、lesbianカップルは、「純粋な関係性」を生きている/生きざるを得ないので、現代に固有の不安定を孕まざるを得ない。これも、性的指向が原因なのではなく、それへのスティグマが関係していると考えて差し支えないだろう。もしもそうであるならば、上記で見た、LMと、HMの子育てにおける差異は、性的な多様性について、平等と敬意が払われる時代がくれば、消失するだろう。lesbian-mother、gay-fatherという概念自体が歴史的に移り変わってきたものであるし、これからもそうでない確証はないのである。

以上が、Staceyの議論である。

#### 4. 考察

Lesbian-motherの子育てをめぐる発達心理学分野の諸研究を年代を追って振り返った上で、それらをめぐってなされた、4レビューを見てきた。4レビューは、それぞれ、著者の専門を異にするので4領域からのレビューとなったが、決して、その領域を代表した見解であるわけではないことは、蛇足ながら、付け加えておきたい。

4つのレビューを、やや強引に図式化すると、まず、LMとHMの子育てに差異はあるのか否かについて、3-1は若干の留保を付けつつも2の実証研究の結果を支持して、差異はないと結論づけ、生殖補助技術を婚姻夫婦に限定せねばならぬ理由はないとした。一方、その他3編のレビューは、内容の差はあれ、いずれも、LMとHMには、なにかしらの差異があるとする。ただしその理由は、異なる。3-2と3-3は、2で見た諸研究には、いくつかの致命的な方法論上の不備があると指摘する点で共通している。3-2は、「差異なし論」は実証されていないのだから、LMをHMと法的に同等に扱わねばならぬことにはならないとすることに対して、3-3は、たとえ「差異なし論」が実証されていないとしても、だからといって法的認知を認められないということにはならない、とする。一方、3-4は、2は自らの見いだした、差異ありとするデータを過小評価しているのであり、差異は見いだされていたとする。そして、3-1~3-3は、LMの問題は、LM個人の問題であると捉えていたのに対して、3-4は、LM問題という社会問題があるだけであって、社会におけるLMの概念構成等が変化すれば、LM問題も問題とみなされない事態になることもあり得るし、現にこれまで、概念は変化してきたとする。従って、LMが子どもに危害を及ぼす原因は、親個人にあるのではなくて、LMを問題視する社会にあるのだとする。

以上を整理すると下表のようになる。

【表 LMの子育てに関する4つのレビュー】

本稿の節	LMとHM/HFの子育てには差異はあるか	発達心理学分野における実証研究をどのように評価するか	LMは子どもに危害を与えるか	問題の所在は個人か社会か
3-1	差異なし	支持する	危害なし	個人
3-2		支持しない 方法論上に不備あり	危害あり	個人
3-3	差異あり	支持しない 方法論上に不備あり	危害なし	個人
3-4		支持する データに見落としあり	危害なし	社会

(筆者作成)

Golombokが、LM研究をはじめた動機は、1970年代後半、離婚後の親権紛争において、同性愛行為を指弾されて、親権を失う母親たちを、目の当たりにしたことであったという。その後、発達心理学分野において、多数の研究が積み重ねられてきたことは見てきたとおりであるが、しかし、それらの評価については見解が錯綜しており、本稿はそれらについての若干の整理を行った。

男女の性差を探求する研究は、伊藤(2000)によると、19世紀末に発展し、20世紀前半、個人差の研究やそれを

測定するための各種心理テストの開発もあいまって、日本では1970年代初期に隆盛期を向かえる。当初は、男女の能力の優劣差を析出することが目指されるが、やがて、男女の優劣という量的差異から、言語能力と視覚的空間認知能力など、特質の差へ、さらには、男女の行動の特徴の違いは「性別という地位」に基づいて期待される「役割」の差によってもたらされるという見方が生まれ、以後、性役割 (sex-role) 研究が発展する。それまでの性差を測定し、比較し、記述するという静態的な捉え方から、性による役割の差を作り出す文化的・社会的条件を明らかにしようとする動態的な捉え方へと研究の視点が変化したという。

現実の問題として、例えば、lesbian-mother当事者が「偏見」に対処していくためには、発達心理学的実証研究は、一定の「武器」となることはたしかであろう。しかし、おそらく、それらの研究の後にも、なんらかの「差異」が見いだされ続けるのは、比較というものの一般がそうであるように、宿命ではないだろうか。従って、「差異がないから、問題はない」という議論はおそらく論破されることが必定なのではないだろうか。それよりも、同性愛を「問題視」すること自体、子どもがいじめられる原因を親個人に帰着させること自体を問うていくしかないのかもしれないし、そのように研究史が展開しているのは、見たとおりである。しかし、個人から社会へと単線的・不可逆的に視点が移行するのでは必ずしもないならば、問題は単純ではない。だからこそ、このテーマはマイノリティの問題として片づけられない複雑な射程を持つのではないだろうか。

## 謝辞

心理学用語に関して、佐藤達哉先生（立命館大学）にご指導をいただいた。ここに謝して記したい。

## 注

- 1 厚生労働省「平成15年度全国母子世帯等調査」より。  
<[http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/kouhyo/indexkk\\_26\\_2.html](http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/kouhyo/indexkk_26_2.html)>accessed 1 Dec.2005.  
なお、国立社会保障・人口問題研究所『日本の世帯数の将来推計（全国推計）』（2003年10月推計）によると、2000年度のひとり親と子からなる世帯は、358万世帯である。<<http://www.ipss.go.jp/pp-ajsetai/j/Hprj2003/hprj2003.pdf>>accessed 1 Dec.2005.
- 2 この法律により、「性同一性障害」者は、戸籍上の性別を変更できることとなった。ところが、それには五つの条件が付されたのだが、その一つが、「現に子がいないこと」というもので、大きな波紋を呼んだ。それについて、法案提出に関係した南野知恵子は、「同性間の婚姻や同性が親になる可能性ができ、理解を得られないから」と述べたという。堀江（2006）近刊より。
- 3 lesbian,gay,bi-sexual,transgenderを略してこう呼ばれている。
- 4 gay-fatherにはLMとは異なり、代理母などの問題群があり、別の考察を要する。本稿ではLMに焦点を絞りたい。また、英語表記とするのは、本稿におけるLMは、英米圏の人たちであり、日本とはまた異なる文化背景を持つことを銘記するために、あえて英語表記とする。lesbian-motherのパートナーのlesbianのことを、Brewaeyes（1997）にならって、lesbian-social-mother、略して、social-LMと表記する。
- 5 この訳語は、Golombok（1994=小林他訳1997:122）を参照した。
- 6 California Psychological Inventoryの略。
- 7 ちなみにこの時期の研究においては、LMは、自然妊娠したか養子縁組をした例がほとんどだが、Golombok（1983）の調査対象には、27人中、AIDにて妊娠した女性が1名いた。Golombokは、1970年代後半以降、現在に至るまでこのテーマに取り組む。その経緯は、Golombok（2002）に詳しい。
- 8 UCLA医療センター、神経精神病学、心理行動科学部局所属。
- 9 LM50人のうち82%、HM40人のうち90%は離婚または別居経験あり。LMのうち3人は死別。どちらのグループも10%は一度も結婚していなかった。
- 10 Bem, Sandra L.,1974,"The measurement of psychological androgyny," *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-62.  
邦語文献では、東清和,1984,「Bem Sex-Role Inventory (BSRI) について」『日本社会心理学会発表論文集』日本社会心理学会第25回大会準備委員会（『日本社会心理学会研究発表論文集』の改題）
- 11 Lubin, B.,1965," Adjective Check Lists for the measurement of depression,"*Archives of General Psychiatry*, 12, 57-62.  
加藤雅志,2004,「Effects of euthanasia on the bereaved family and friends: a cross sectional study」  
Nikkie B Swarte, Marije L van der Lee, Johanna G van der Bom, Jan van den Bout, A Peter M Heintz

BMJ2003;327:189-192」日本サイコオンコロジー学会ニューズレター No.36-09

<[http://www.jpso-society.org/news/no36/36\\_9.html](http://www.jpso-society.org/news/no36/36_9.html)>accessed 28 Nov.2005

12 the Jackson Personality Research Form-E ( PRF-E )

JACKSON, D. N. ,1974,Personality research form manual ( rev. ed. ) Goshen, N. Y.: Research Psychologists Press.

13 Wechsler Prescool and Primary Scale

14 Wechsler Intelligence Scale for Children

15 うち、26家族は、カップル、7家族はシングルマザー、4家族は、元LMカップルである。子を持った後、離別し、別離後も共同で子育てを続けており、子は、双方の母親のもとを行き来している。37家族中、17家族が匿名ドナーによるAIDで子を得、10家族は、非匿名ドナーによるAIDで子を得た。4家族は、男性との性的交渉による妊娠、3家族は、養子縁組、残り3家族は妊娠の経緯について無回答だった。トータルで66人の女性が参加した。28才から53才で、61人が白人、非ヒスパニック系。2人がアフリカ系アメリカ人または黒人、3人がその他、74%が大卒、48%が大学院卒だった。CBCL・CSVQ ( the Elder Children's Self-View Questionnaire ) 構造化面接を用いて、子どもの適応性を調査した。

16 1995年に the American Psychological Association ( APA )、2002年にthe American Academy of Pediatrics ( AAP ) が、lesbian-mother、gay-fatherによって育てられた子が悪影響をこうむることはない旨の声明を公表している。

17 オランダ、ライデン大学病院、産科婦人科生殖補助医療部局所属。

18 Human Fertilisation and Embryology Authority ( 英国 )

19 LMの調査への依頼は、ブリュッセル大学病院不妊部局が実施した。1986年から1991年にかけて、当部局にて施術を受けた家族である。調査依頼への回答率は100%だった。統制グループのHMについては、ライデン大学病院の産科部局、不妊部局それぞれが自然妊娠家族、AID被施術家族に対して依頼した。前者の回答率は60%、後者は53%だった。手法は構造化面接と質問紙法を使用した。

20 注3参照。

21 The Sperm Bank of California. 1980年代から既婚か非婚か、性的指向にかかわらず精子を提供してきたとされている。

22 The teacher report form of the Child Behavior Checklist ( Achenbach & Edelbrock, ( 1986 )

23 Locke-Wallace Adjustment Test

24 オランダ、ロッテルダム、エラスムス医療センターの医療倫理部局、生殖補助医療センター、Netherlands Institute of Health Sciences ( NIHES ) の医療心理学・心理療法部局

25 Golombok et al. ( 1983 )、McCandish ( 1987 )、Flaks et al. ( 1995 )、Tasker and Golombok ( 1995 )、Breaeys et al. ( 1997 )、Golombok et al. ( 1997 )、Chan et al. ( 1998 )、Gartrell et al. ( 2000 ) の6論文である。

26 から 章から構成されている。

において、まず、いくつかの、同性愛者の子育てをめぐる親権等が争われる裁判が増加するの実態を受けて、多くのローレビュー論文が書かれているが、同性愛者の子育てが、その子どもに対して、実際どのような影響を与えているのか、考察が十分でないことを指摘する。

において、子どもへの影響に関する、社会科学系の研究は、多数あり、しかも結論がほぼ似ているのであるが、それらの研究方法の根本的な問題点を指摘する。

において、異性の親二人によって育てられることの利点を示し、また、同性愛者の子育てを支持する論文においてすら、精読すれば、子どもへの潜在的危険を読み取ることができることを指摘する。

において、実際の判例を検討し、同性婚と同性愛者の子育ての問題の関連性と、非関連性を示す。

において、子どもの福祉を守るために、同性愛者の子育てをめぐる裁判が提起されたときの、判断の指針を提案する。具体的には、反証可能な推定、という原則を導入することを提案する。

27 Wardleが本論文を書いた時点では、まだ、Lawrence v. Texas ( 2003 ) の、ソドミー法違憲判決が出ていない。

28 この調査の出典は、Wardle論文中の注より引用する。

Note 55. See Richard Williams, Potential Effects on Children Reared With in Same-Sex Marriage 18 ( 1996 ) ( unpublished manuscript on file with author ) .

29 この調査の出典は、Wardle論文中の注より引用する。

Note 126. See L. Colette Jones, Father-Infant Relationships in the First Year of Life, in Dimensions of Fatherhood, ( Shirley M.H. Hanson & Frederick W. Bozett eds., 1985 ) p105

30 この調査の出典は、Wardle論文中の注より引用する。

Note 130. See Kyle D. Pruett, The Nurturing Father 30-31 ( 1987 )

31 この調査の出典は、Wardle論文中の注より引用する。

Note 140. See David Blankenhorn, *Fatherless America: Confronting Our Most Urgent Social Problems* 1 (1995) at 31.

32 lesbian-motherと同様、アメリカの文化背景をふまえて理解すべきことを銘記するために、あえて英語表記したい。

33 gender preferenceをこのように訳した。sexual preferenceを性的指向と訳されているに对照させれば、ジェンダー指向となるのかもしれない。男女のジェンダー行動について、その本人はどのような好みを持っているか、という意味に理解している。

## 参考文献

- AAP,2002,"Coparent or Second-Parent Adoption by Same-Sex Parents," *Pediatrics*,109( 2 ) 339-340,  
( <<http://aappolicy.aappublications.org/cgi/content/full/pediatrics%3B109/2/339>>accessed 26 Jan.2005 )
- Baumrind,D.,1995, " Commentary on Sexual Orientation: Research and Social Policy Implications," *Developmental Psychology*,31  
( 1 )130-136.
- Bem, S. L.,1974,"The measurement of psychological androgyny," *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42:155-162.
- Brewaeys,A.,Ponjaert,I.,Van Hall,E., and Golombok.S.,1997,"Donor insemination: child and family development in lesbian-mother families with children of 4 to 8 years old," *Human Reproduction Update*, 12:1349-1359.
- Cameron,P.,&Cameron,K.,1998,"Homosexual parents: a comparative forensic study of character and harms to children," *Psychological Reports*, 31:757-776.
- Cameron,P.,&Cameron,K.,1997,"Did the APA misrepresent the scientific literature to courts in support of homosexual custody?," *The Journal of psychology*, 131:313-332.
- Chan,R.,W.,Raboy,B.,& Patterson,C.,J.,1998,"Psychosocial Adjustment among Children Conceived via Donor Insemination by Lesbian and Heterosexual Mothers," *Child Development*, 69:443-457.
- Clarke,V.,2002,"Sameness and Difference in Research on Lesbian Parenting," *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 12: 210-222.
- Copper,B.,1987,"The radical potential in lesbian mothering of daughters," in Pollack,S.&Vaughn,J. ( eds. ) *Politics of the heart: a lesbian parenting anthology*, 233-240.
- Flaks,D.K.,et al.,1995,"Lesbian choosing motherhood:a comparative study of lesbian and heterosexual parents and their children," *Developmental Psychology*,31:105-114
- Gallagher,M.&Baker,J.K.,2004,"*Do Mothers and Fathers Matter?:The Social Science Evidence on Marriage and Child Well-Being*," ( <[www.imapp.org](http://www.imapp.org)>accessed 11 Sep. 2005 )
- Gartrell et al.,2000,"The National Lesbian Family Study :3.Interviews with mothers of five-year-olds," *American Journal of Orthopsychiatry*,70:542-548.
- Gillespie,P.,1999,"Preface," in Kaeser,G., & Gillespie,P., ( eds. ) , *Love makes a family:Portraits of lesbian, gay, bisexual, and transgender parents and their families* , Amherst,M.,University of Massachusetts Press,xi-xvi.
- Golombok, S.,Spencer,A., and Rutter,M.,1983, "Children in Lesbian and SingleParent Households: Psychosexual and Psychiatric Appraisal," *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 24:551-572.
- Golombok, S.&Fivush,R.,1994,*Gender Development*,Cambridge University Press, ( 小林芳郎、瀧野揚三訳,1994,『ジェンダーの発達心理学』田研出版 ) .
- Golombok, S.&Tasker,F.,1996, "Do parents influence the sexual orientation of their children? Finding from a longitudinal study of lesbian families," *Developmental Psychology*, 32:3-11, ( Scahffer,H.R.,1998,*Making Decisions about Children*, Blackwell Publishers Limited,無藤隆・佐藤恵理子訳,2001,「親は子どもの性的志向に影響を与えるか? レズビアン家庭の長期研究からの発見」『子どもの養育に心理学がいえることー発達と家庭環境ー』新曜社92-93 )
- Golombok,S.,1997,"Young people's attitudes toward living in a lesbian family: A longitudinal study of children raised by post-divorce lesbian mothers," *Journal of Divorce & Remarriage*, 27 ( 1-2 )183-203.
- Golombok,S.,2002,"Why I study lesbian mothers," *The Psychologist*, 15( 11 )562-563.
- Golombok,S.,et al., 2003," Children with lesbian parents: A community study," *Developmental Psychology*, 39:1-20.
- Goodman,1980,"Some mothers are lesbians," in Norman, E. &Mancuso, A, ( eds. ) , *Women's issues and social work practice*,153-181.
- Green R.,et al.,1986," Lesbian Mothers and Their Children: A Comparison with Solo Parent Heterosexual Mothers and Their Children," *Archives of Sexual Behavior*, 15:167-184.
- Herman,D.,1997,*The anti-gay agenda: orthodox vision and the Christian right*, University of Chicago Press.
- Hoeffler,B.,1981,"Children's Acquisition of Sex-Role Behavior in Lesbian-Mother Families," *American Journal of Orthopsychiatry*, 51:

536-544.

- 堀江有里,2006 ( 近刊 ) , 「人権施策と 性的少数者 へのまなざし 日本におけるその非対称性を中心に」( 仲正昌樹編、『グローバル化する市民社会の変容 ( 仮 ) 』 御茶の水書房
- Hunfeld,J.A.M.,et al.,2001,"Child development and quality of parenting in lesbian families: no psychosocial indications for a-priori withholding of infertility treatment. A systematic review,"*Human Reproduction Update*, 7 ( 1 ) 579-590.
- 伊藤裕子,2000, 「心理学におけるジェンダーのパースペクティブ」伊藤裕子編 『ジェンダーの発達心理学』 ミネルヴァ書房,1-12.
- Javaid,G.A.,1993,"The Children of Homosexual and Heterosexual Single Mothers," *Child Psychiatry & Human Development*, 23: 235-248.
- Kitzinger, C.,1989,"The Regulation of lesbian identities: liberal humanism as an ideology of social control," in Shotter,J., ( ed. ) , *Texts of Identity*, London Sage, 82-98.
- Knight,R.H.,1997,"Homosexual parents are not in a child's best interest," in Roleff, T.L., ( ed. ) ,*Gay rights*, Greenhaven Press,84-89.
- Lerner,R.,& Nagai,A.K.,2001,"*No Basis: What the Studies Don't Tell Us About Same-Sex Parenting*," Marriage Law Project,Washington DC, ( <[http://www.eppc.org/docLib/20030423 No Basis.pdf](http://www.eppc.org/docLib/20030423%20No%20Basis.pdf)>accessed 31 Jan.2006)
- McCandish,B.,1987,"Against all odds:Lesbian mother family dynamics,".in Bozett,F.W., ( ed. ) , *Gay and Lesbian Parents-future perspectives*, Praeger, New York,23-38.
- Miller, J.A, et al.,1982,"The Child's Home Environment for Lesbian vs. Heterosexual Mothers: A Neglected Area of Research,"*Journal of Homosexuality*,7:49-56.
- Patterson,C.,J.,1994,"Children of the Lesbian Baby Boom: Behavioral Adjustment. Self-Concepts and Sex Role Identity," in Green,B.,(ed.), *Lesbian and Gay Psychology: Theory, Research, and Clinical Applications*, 156-75.
- Polikoff,N.,1987,"Lesbian mothers:lesbian families,legal obstacles,legal challenges," in Pollack,S.&Vaughn,J.,(ed.),*Politics of the heart: a lesbian parenting anthology*, 233-240.
- Rand,C.,et al.,1982,"Psychological Health and Factors the Court Seeks to Control in Lesbian Mother Custody Trials,"*Journal of Homosexuality*, 8:27-39.
- Rowen,A.J.,1981,"Notes from the battlefield :Lesbian custody.Common Lives/Lesbian Lives,"*A Lesbian Feminist Quarterly*,2:97-106.
- Stacey,J.,2001," ( How ) Does the Sexual Orientation of Parents Matter?" *American Sociological Review*, 66:159-183.
- 佐藤達哉,1997, 『知能指数』 講談社現代新書.
- Wardle,L.D.,1997,"The potential impact of homosexual parenting on children,"*University of Illinois Law Review*, 66:159-183.
- Wells,J.,1997,"Introduction," in J.Wellse, ( eds. ) , *Lesbians raising sons:an anthology*, Los Angels,CA:Alyson Books, ix-xv.
- Woodhouse,B., B.,2003,"Children's Rights in Gay and Lesbian Families:A Child-Centered Perspective," in Macedo,S., & Young,I.M.,(eds.), *Child,Family,and State*,New York University Press, 273-305.

## Is childrearing by lesbian-mothers healthy? : empirical studies in developmental psychology and disputes about the children of lesbian-mothers in America & Europe.

ARITA Keiko

Abstract:

Abstract: In the last half of the 70's in America, lesbians who were married and had children began to come out. When they waged custody battles against ex-husbands, they lost cases, one after another, as result of their sexuality. In 80's, courts began to employ a criteria of judgment named 'nexus test.' A nexus test prohibits to depriving lesbian-mothers of custody merely because they are lesbians, as long as children are not harmed by them. So authorities of developmental psychology were asked examine the psychological adjustment of the children of lesbian-mothers. In the main part of the paper, author reviews these experimental studies. The author introduces studies for examples, by Golombok,S., Patterson,C.J., and Brewaeys,A. Golombok established the Family and Child Psychology Research Center in 1989 to conduct research on parent-child relations and the psychological development of children raised in non-traditional families. She is famous for her longitudinal follow-up study of the children of lesbian-mothers in the U.K. Patterson has been an expert witness in the court cases of lesbian-mothers. Brewaeys is a professor of the Department of Obstetrics and Reproductive Medicine, University Hospital, Leiden, The Netherlands. In the latter part of the paper, the author poses questions about the general preconceptions within the developmental psychology itself.

Key words : Lesbian-mother, Nontraditional rearing, Artificial insemination, Golombok,S., Patterson,C.J.,